中唐期における性説の展開と役割

——歐陽詹「自明誠論」・皇甫湜「孟荀言性論」を中心として——

末岡 實

はじめに

中唐期において韓愈（七六八—八二四）が「原性」を、李翺（七七四—八三六）が「復性書」を著し、人の性や情についての分析を行い、人性論を展開したことは、周知の通りである。

ところで、韓愈や李翺と同時期に活躍した歐陽詹（?—八〇一?）及び皇甫湜（七七七?—?）も同様にそれぞれの性説を開陳している。歐陽詹の「自明試論」及び皇甫湜の「孟荀言性論」がそれである。しかしながら、この歐陽詹と皇甫湜については、文學方面の研究においては、韓愈との關りから名前は知られているものの、思想方面からは、全く着目されていないようである。

さらにまた、韓愈と李翺の性説についても、一般には、宋學との關連から主に「復性書」が取り上げられることは多いが、韓李兩性説相互の思想上の關係や、同時代的な意義という觀點からは、餘り論じられていないのではなかろうか。

そこで、小論では、歐陽詹と皇甫湜の性説に焦點をあてつつ、中唐期に展開された以上の四者の性説が思想内容上、如何なる關係をもつものであるのか、あるいはこれらの性説が如何なる意義を有し役割を果したものであるのか、などの點を解明すべく以下、検討を加えていくことにする。

一、歐陽詹・皇甫湜・韓愈・李翺の交遊

本節では、標題の四人における思想上の相互の影響關係の有無を明かにするための基礎作業として、歐陽詹と韓李との交遊狀況、及び皇甫湜と韓李との交遊狀況について、具體的に検討してみることにする。

歐陽詹（字は行周）の傳は、『新唐書』に次のように見える。

> 進士に擧げられ、韓愈・李觀・李絳・崔羣・王涯・馮宿・庾承宣と聯第す。皆天下の選たり。時に龍虎の榜と稱せらる。閩人、進士に第するは、詹より始まる。詹、父母に事へて孝あり、朋友と信義あり。其の文章、切深にして、明辯を回復す。愈と友たりて善し。詹、先づ國子監の四門助教と爲り、其の徒を率ゐて闕下に伏し、愈を博士に擧ぐ。卒年四十餘。崔羣これを哭すること甚しく、愈、詹が哀辭を爲る。（文藝傳）

傳が「文藝傳」に收載されていることから自ずと知られる通り、歐陽詹は、文人として名を馳せた人物である。著に『歐陽行周文集』十

卷がある。歐陽詹は、貞元八年、進士の科に及第するが、時に「龍虎の榜」と稱せられた同年の及第者には、その世評に違わず、韓愈や、李華の甥の李觀、のちに宰相の位にまで登る李絳・崔羣・王涯などが名を連ねている。因みに、この時の試驗の主考は、のちの宰相、陸贄(陸宣公)であり、また、副考の一人に、韓李と因緣の深い梁肅の名が確認される。

上掲の歐陽詹の本傳も述べているように、韓愈は、「歐陽生哀辭」(『韓昌黎集』卷二二)を著している。この「哀辭」の記述によって、韓愈と歐陽詹の交遊狀況は、より具體的に窺い知ることができる。

建中・貞元閒(七八四)、余、江南に就食し、未だ人事に接せざるに、往往にして詹の名を閭巷の閒に聞く。詹の、江南に稱せらるるや久し。貞元三年(七八七)、余、始めて京師に至り進士に擧げらるるや、詹の名を聞くこと尤も甚し。八年春、遂に詹の文辭と考試を同じくし、登第して始めて相識る。自後、詹は閩中に歸り、余は或いは京師・他處に在り。詹と見ざること久しきは、惟だ詹の、閩中に歸りし時のみ然りと爲す。其の他の時は、詹と離るること率ね歲を歷ず。時を移せば則ち必ず合ひ、合へば必ず兩つながら其の趨く所を忘れ、久しくして然る後に去る。故に余と詹と、相知ること深しと爲す。……(中略)……十五年冬、余、徐州從事を以て京師に朝正す。詹、國子監の四門助教と爲り、將に其の徒を率ゐて闕下に伏し、余を擧げて博士と爲さんとす。會〻監に獄有りて上すを果さず。…(中略)……詹の事業・文章は、李翺既にこれが傳を爲る。

右の文章によると、韓愈が、歐陽詹の高名を早くから聞き知ってはいたものの、歐陽詹と面識を得るのは、貞元八年の進士登第後のことである。恐らく合格發表の後、主考すなわち陸贄の邸內で催された謝恩の儀の宴場においてであったろう。以後、韓愈と歐陽詹の兩人は、所在を異にしつつ、互いに來訪して親交を重ねる。貞元十五年には、國子監の四門助教となった歐陽詹が、韓愈を博士に推擧しようとした。その三年後、韓愈は四門博士に任官しているが、この件には、歐陽詹の力が與っていたに相違ない。もっとも、韓愈にとって「相知ること深き」歐陽詹は、韓愈が四門博士に赴任する前年、すなわち貞元十七年あたりにこの世を去っていたようである(羅聯添『韓愈硏究』一四三頁參照)。

さて、上引「哀辭」の末尾の記述によれば、歐陽詹の傳記は、李翺によって書き著されたのであるが、殘念ながら現存しない。また、李翺の文集『李文公集』中には、目錄に「歐陽詹傳(闕)」とある以外、歐陽詹に言及した記事は、全く見當らない。しかしながら、碑傳・墓誌銘等の起草者には、その物故した人物と親交があり、かつある程度の身分を有する文人や學者が選ばれるのが通例ということのみならず、第一に、上述の如く「哀辭」を著したのが歐陽詹の知己、韓愈である點、第二に、「哀辭」とはセットをなすところの「傳」を記したのが韓愈と親交のある李翺である點から推すに、歐陽詹と李翺との閒にも、やはりかなり緊密な交遊關係が存した、と見なすのが妥當であろう。李翺は、貞元十二年、汴州に居た韓愈を訪れ「兄の交り」を得て以來、韓愈と親交が續く(『李文公集』卷十六「祭吏部韓侍郎文」參照)のであるが、歐陽詹とのあいだにもその頃から交流が始まっていたと思われる。

次に、皇甫湜(字は持正)を取り上げる。著に『皇甫持正文集』六卷がある。傳は『新唐書』の韓愈の傳に、その附錄の形で孟郊・張籍等

々とともに載せられており、この傳のたて方自體、すでに皇甫湜と韓愈とが因縁淺からぬことを物語っている。また、『四庫全書總目提要』(巻一五〇別集類三「皇甫持正集六巻」の項)では、皇甫湜の文章を評して、「李翺と同じく韓愈より出で、翺は愈の醇を得、湜は愈の奇崛を得。」と述べ、韓愈を車の本體に見立てるなら、李翺・皇甫湜をその兩輪の如くにとらえている。實際、一方の皇甫湜は、李翺宛ての書簡(巻四「與李生第三書」)に、

> 韓退之の張籍に復するの書(巻十四「答張籍書」)に曰く、頑然として入らざる者、親しく言を以てこれを諭して入らざれば、則ち其れ吾が書を觀るもこれ固より將に得る所無からんとす、と。生、これを勖むるのみ。

と韓愈の言葉を引く。他方の李翺も、皇甫湜宛ての書簡(巻六「答皇甫湜書」)に、

> 韓退之の所謂る(巻十六「答崔立之書」)奸諛を既死に誅し、潛德の幽光を發すとは、是れ翺の心なり。

と韓愈の言葉を引く。皇甫湜と李翺とは、ともに韓愈の言葉を援用しつつ、互いに自説を開陳しているわけである。この事實によって、皇甫湜と李翺を「韓門の兩大弟子」(羅氏前出書一九〇頁)と位置づけることもできよう。なお、皇甫湜と李翺は、實は相互に「文」に關し活潑な議論を交しているのだが、ここでは別稿(1)に譲り、割愛することにする。

以上によって皇甫湜と韓李とに親交のあったことは明白であるわけだが、その交遊は、一體いつ頃から始まったのであろうか。羅聯添氏(前出書一八七頁)は、皇甫湜が初めて長安に至ったのは貞元十九年(八〇三)であり、時に韓愈も都に居り、皇甫湜が韓愈の面識を得るのは、早くともその年にある、と推定している。確かに、羅氏も言うように前年の貞元十八年、進士科の考試に際し、韓愈が陸傪(字は公佐。後出)に提示した推擧者の中に皇甫湜の名が含まれておらず(『韓昌黎集』巻十七「與祠部陸員外書」參照)、貞元十八年以前、皇甫湜は、韓愈と親交を結ぶ状況にはなかったようである。しかし、皇甫湜と李翺との間に交流が始まるのは、それより三、四年時代が遡るかも知れない。そして、皇甫湜の方では、すでに韓愈の名聲や作品を見聞きしていた、とも考えられる。というのは、上記の李翺宛て皇甫湜の書簡に引く韓愈の「答張籍書」は、韓愈三十歳(貞元十三年)以前の作であった(錢穆「雜論唐代古文運動」三參照)こと、また、李翺宛て皇甫湜の第二の書(巻四)に、「近ごろ風教、偸薄なること、進士尤も甚し。……」と云う皇甫湜が發する非難は、貞元十四年、ちょうど進士に擧げられた李翺に對する言葉であった(錢基博『韓愈志』「韓門弟子記」皇甫湜の項參照)ことなどからである。こういった状況に鑑みるなら、皇甫湜は、李翺との交遊の中から韓愈の存在を知り、李翺を介して韓愈の面識を得るに至った、と判斷されなくもない。

歐陽詹と韓愈・李翺との間に、密接な交流の存していたこと、皇甫湜と韓李との間も同樣であったことは、以上の通りである。ただ、歐陽詹と皇甫湜の間には、兩人の閲歴から推せば、直に面談する機會の存した可能性は薄いようだが、互に相手の存在なり、その詩文なりを知り得ていたであろうことは、充分に考えられる。當時の文人すなわち知識人の仲間うちでは、他者の文學的、思想的著作であれ、個人に宛てられた書簡であれ、それらは相互に回覽し讀まれる状況にあったからである。(2)

さて、とにもかくにも人脈上、一集團と見定め得るところの韓愈・

李翺・歐陽詹・皇甫湜の四者のいずれもがみな、性ないし情に關する論文、すなわち「原性」・「復性書」・「自明誠論」・「孟荀言性論」をそれぞれ著している點は、注目に値する。これら四種の作品が、各々孤立した形で書き著され、偶然にも時を同じうして出揃ったとは、到底考えられない。やはり、これらの性説が著作されるに至ったのには、然らしむる背景があり、四者の閒にも、思想的な影響を及ぼす、あるいは受けるといった關係が存していたはずである。さらに、彼ら四人にとどまらず、實は彼らの周邊の文人、思想家を含め、人性論が恆常的な話題として活潑に議論されていたであろうことは、想像するに難くないところである。

二、「原性」・「復性書」の成立年代

前節の基礎作業に引續き、本節では、韓愈・李翺・歐陽詹・皇甫湜の各性説相互閒における思想的影響の授受の關係を探究するために、各性説が著作された年代について一考し、各作品の先後關係を定めることにする。

韓愈の「原性」(『韓昌黎集』巻十一)に關しては、他の「原道」等の四篇を併せ、五原は一時に作られたものとし、朱子が次のように注釋を加えている。

當にこれ一時の作なるべし。兵部李侍郎に與ふるの書(『韓昌黎集』巻十五)に謂ふ所の、舊文一巻、敎道を扶樹し、明白にする所有りとは、疑ふらくは卽ち此の諸篇(原道・原性・原毀・原人・原鬼)なり。然らば則ち皆是れ江陵以前の作りし所。(韓文考異)

朱子と同様に羅聯添氏(『韓愈研究』七〇頁)も、五原の諸篇は、韓愈が江陵府に赴任する以前、郴州に滯在してい時に作られた、とする。韓愈が江陵府の法曹參軍の辭令を受け取ったのは、貞元二十一年、時に改元されて永貞元年(八〇五)八月のことで、郴州には待命のため數箇月滯在していた(前野直彬『韓愈の生涯』一一一頁)。つまり「原性」は、貞元二十一年、韓愈三十一歳の作となる。しかし、朱子の云う「敎道を扶樹し、明白にする所」が、五原の內容を指すことは動かないとしても、五原が一時の作か、郴州滯在のおりの著作かどうか、まだ疑問は殘る。だが、「原性」に限って言うなら、それが貞元十九年より以前の著でないことだけは、確實であると思われる。と言うのは、のちに詳述するであろうが、「原性」の末尾に「今の(性を)言ふ者は、佛老を雜へて言ふなり。……」と說くのは、韓愈が皇甫湜の性説の內容を熟知した上で、それを強く批判したものに他ならぬと考えられ、さらに、前節で見たように、韓愈が皇甫湜を知るのは、早くとも貞元十九年であったからである。それ故、「原性」は、貞元十九年を含むにせよ、それ以降の年代の作となる。

次に、李翺の「復性書」(『李文公集』巻二)の作成年代について考えてみよう。この問題については、李翺みずから「復性書」の中で「吾が生、二十有九年」(下篇)と述べ、李翺二十九歳の作であることは確かなのだが、彼の生沒年とも關わって、諸説が生じている。しかしながら、最も妥當な見解と考えられるのは、羅聯添氏(「李翺研究」『國立編譯館館刊』第二巻第三期五九頁)の次の説である。羅氏は、「復性書」に云う「南のかた濤江を觀、越に入るに、吳郡の陸傪、存す」(上篇)の句に着目し、この句の意味するところは、貞元十五年、李翺が越に至った時、陸傪は存命していた、と言うことであるから、見方を換えれば、その事を記す「復性書」を李翺が書き上げた時、すでに陸傪は死去していたことになる、と解する。そして羅氏は、それ故「復性

書」の作成時期は、陸傪の死（貞元十八年四月、『李文公集』巻十三「陸歙州述」參照）以後でなければならず、他の傍證も考え合せると、「復性書」の著作年代は、貞元十八年（四月以降の年内）に定められる、と推斷するのである。

右の問題に關し、いま少し掘り下げて檢討しておきたい。「復性書」は、上・中・下の三篇よりなる。上篇は序論ないし總論、中篇は本論、下篇は跋文的な性格を有し、凡そ三千三百九十餘字が費されている。たとひこの作品が一氣に書き上げられたにせよ、そのためには、核となる見解なり、下敷となるものなりが、すでに先取りした形で李翺に纏まり、用意されていたのではなかろうか、と考えられるのである。

「感知己賦」（『李文公集』巻一）に云う。

> 貞元九年（七九三）、翺、始めて州府の貢擧の人事に就き、其の九月、文章一通を執り、右補闕安定梁君（肅）に謁す。……（中略）……梁君歿し、玆に五年、翺、聖人の經籍の教訓・文句の旨を學び、文を爲るに數萬言を將つてす。……（中略）……中庸の蹈むこと難きを擇び、困頓すと雖も、而も終に其の爲る所を改めず。

李翺は、梁肅の死を契機として、聖賢の教えの奥旨を學び修め、ついに一文を纏め上げる。その「文」の内容は、「中庸」の本旨を發揮したものに他ならない。「中庸」に關するこの著作が、あるいは『經義考』（巻一五一）に云う『中庸說』一巻（現在は亡佚）を示すとも考えられるが、ともかく「中庸」に纏わる李翺の論述は、梁肅の沒後五周年すなわち貞元十三年（七九七）に、存在していたことになる。また、李翺は、「復性書」を著した理由を次のように述べている。上篇の後半部に述べているのだが、掻い摘まんで掲出する。

> 子思、仲尼の孫、其の祖の道を得、中庸四十七篇を述べて、以て孟軻に傳ふ。……軻の門人の達者、公孫丑・萬章の徒、蓋しこれを傳ふ。秦の、書を滅するに遭ひ、中庸の焚かれざる者、一篇存するのみ。是に於て此の道、廢缺す。……嗚呼、性命の書、存すと雖も、學者、能く明かにする莫し。……遂に書に書して、以て誠明の源を開く。……命じて復性書と曰ふ。

李翺は、聖人の道を傳える「中庸」の書が存しているにもかかわらず、いまの學徒がこれを明かにできずにいるために、そこでみずから「中庸」を解明し、誠明の源を發揮しようとして「復性書」を著した、と述懐する。そして、中篇では、上篇の「我に問ふ有り。我、吾の知る所を以て傳ふ。」の言葉を受け、問答形式をとって「中庸」の本旨を敷衍しつつ説明を加えている。しかしながら、「中庸」の「教訓・文句の旨」に對する解說、謂わば〝中庸說〟は、貞元十三年にすでに編まれていた。とすれば、構成上「復性書」の本論に位置する中篇において、李翺が述べる見解の多くは、すでにみずから書き著していたところの〝中庸說〟の中に準備されていた、と考えてもよさそうである。

つまり、李翺のこの〝中庸說〟に對し、「人とこれを言ひ、未だ嘗て我を是とする者有らず」（上篇）という状況の中で、陸傪一人が「子の言、尼父の心なり」（同）と讃辭を呈するのであるが、李翺は、この唯一の讚同者に先立たれる。李翺は、陸傪に思いを馳せつつ「復性書」を完成させたのである。內容的に先取りするものは、すでに貞元十三年に編まれていたと考えられるものの、「復性書」全篇の作成については、時に貞元十八年（八〇二）とする羅氏の說にいまは從う。(3)

なお、歐陽詹の「自明誠論」と皇甫湜の「孟荀言性論」に關して

は、その著述年代を明確にし難い。だが、「自明誠論」は、歐陽詹の没年が貞元十七年頃である以上、「原性」及び「復性書」に先だって書かれたものであることは、間違いのないところである。前述の通り、「復性書」は、貞元十八年の作であり、「原性」は、同二十一年あるいはそれ以前であった場合でも遡ること一、二年の作、と定められたからである。のこる「孟荀言性論」は、「復性書」の後、「原性」の前に書かれたと推測される。この點については、次節において、四者の性説の內容を比較検討することにより、明かにし得るものと考える。

三、四者の性説の內容と相互關係

まず、四者の性説のうち最も早くに書き上げられたと考えられる「自明誠論」(『歐陽行周文集』巻六) を掲げれば、次の通りである。

> 性によりて物に達するを誠と曰ひ、學によりて誠に達するを明と曰ふ。上聖は誠を述べて以て明を啓き、其の次は明によりて以て誠を得。苟くも聖を將つに非ざれば、未だ明によらずして、誠を致す者有らず。文武周孔は、性によりて誠なる者なり。其の性無くんば而て及ぶべからず。顏子游夏は、誠を得て自ら用ふる者なり。其の明有りて、得て至るべし。古より而還、明によりて誠なる者衆し。尹喜は、明によりて誠なりて長生す。(公)孫弘は、明によりて誠なりて卿と爲る。張子房(良)は、明によりて誠なりて劉(邦)を輔く。公孫鞅は、明によりて誠なりて嬴(政)を佐く。明の誠に於ける、猶ほ玉の、琢くを待つがごとし。器用、是に於てか成る。故に曰く、玉、琢かざれば器を成さず、と(『禮記』學記)。……(中略)……凡そ百君子に明有るなり。何ぞ夫の誠なるに急がざる。先師に言有りて曰く、生れながらにしてこれを知る者は上、と(『論語』季氏)。所謂る性によりて誠なる者なり。又曰く、學んでこれを知る者は次、と(同)。所謂る明によりて誠なる者なり。且つ仁すら遠からんや。我、仁を欲して斯に仁至る。夫れ然らば則ち明によりて誠なるは、致すべきなり。苟くもこれを致すや、性によりて誠なると、派を異にして流れを同じくす。これを知る者は、これを知る。

冒頭句は、「中庸」の「誠なるによりて明かなる、これを性と謂ひ、明かなるによりて誠なる、これを敎と謂ふ。」の句を踏まえて述べたものである。また、量的に全體の三分の一にあたる中閒部は、掲出を割愛したが、その中には、「大學」のいわゆる八條目の記事を念頭に置いて論述した字句が認められる。この二つの事實は、他ならぬ李翺の「復性書」との關連を思い起こさせる。しかして、「自明誠論」と「復性書」を並べて見ると、兩者が「中庸」と「大學」の該句を踏まえ、論據としていることはもとより、內容上、極めてよく重なり合う論述が存することに氣づく。就中、李翺における聖人と賢人の規定については、歐陽詹の見解を襲ったのではないか、と考えさせるものがある。

歐陽詹は、「上聖」を「性によりて誠なる者」とし、「其次」は「明によりて誠を得」る者あるいは「其の明有りて得て(誠に)至る」者である、と規定する。他方、李翺は、「誠とは聖人これを性とするなり」(上篇)と云い、「其の性に復るとは賢人これに循ひて已まざる者なり」(同)と云う。李翺のこの規定を少しく敷衍するなら、「復性」に従い努めるには「明の覺する所と爲る」(中篇)ことが前提であり、そして、「其の性に復る」とは具體的には「性命の道に歸るなり。道

とは至誠なり。」（上篇）、と補足される。以上の歐陽詹・李翺各々の規定を圖式化すると左の如くになろう。

	等級	德目	修養
歐陽詹	上聖	誠	（生得の性）
	其次	明	學
李翺	聖人	誠	（生得の性）
	賢人	明	復性

右の表から判明するように、歐陽詹の人物等級の規定を李翺のそれに置き換えると、兩者の總體的な規定は、〈聖—誠—性〉・〈賢—明—〝修養〟〉という具合に、パラレルに對應するラインで一括することが可能である。ただ、聖人の德である誠に至るための修養に關しては、歐陽詹が「學」に、李翺は「復性」にその道を求めており、兩者の修養觀は異なっている。無論、普遍的な人間の修養という次元で修養の道が語られ、聖人の德目である誠に至ることが可能なものとして意識されていた點においては、兩者に何らの相違もないのであるが、要するにその出目は、人の性を異なるものと見るか、異ならないものと見るか、そのどちらに與するかにあろう。

李翺は、「情に善有り不善有り、而して性に不善なし」（中篇）と述べ、性は善のみとする性の一元論に立ち、「百姓の性と聖人の性と差はざるなり」（上篇）とし、人によって性が異なるものではない、と考える。これに對し、歐陽詹の場合、「文・武・周・孔」に始まり、「顏子」・「游・夏」……「羸」に終る人物の列擧の次第が、明かに序列をもって位置づけられていることや、(4)『論語』の該句を引用して各々「上聖」・「其次」に配置していることを考えれば、歐陽詹の見解は、漢儒以來の性九品説なり性三品説なりの考え方に沿ったものと言え、性の等級づけを認め、人によって性は異なるとする立場に左祖する、と見て差し支えなかろう。かかる人性に對する兩者の認識の相違が、一方の李翺は、不善なる情を滅して人に具有する善なる性に復るという方法を取り、他方の歐陽詹は、學問という人爲的な手段によって「上聖」の性に近づこうという方法を取る、という修養觀の相違となってあらわれたものと思われる。因みに、歐陽詹が、『禮記』學記篇の「玉琢かざれば器を成さず、人學ばざれば道を知らず」と云う言葉を引いて學問の重要性を力説し、學問にこそ修養の本質があるとするのは、(5)四門助教として國子監に在職していたことと、全く無縁なことではないかも知れない。あるいは「自明誠論」は、在任中の貞元十五年頃に、國子監の學生に向けて説き著わされたものであった、とも推測されよう。

次に、皇甫湜の「孟荀言性論」（『皇甫持正文集』巻二）について檢討する。その大體を掲げれば次の通りである。

> 孟子曰く、人の性は善、と（告子上）。荀卿曰く、其の善なる者は僞なり、と（性惡）。是れ聖人に於ける、皆一偏の論なり。推してこれを言はば、性の品に三有り。下愚・中人・上智、是れなり。聖人、性の品を言ふに、亦三有り。上るべき、下るべき、移らざる、是れなり。……（中略）……二子の説、其の始を原ねて其の終を要む。其れ輔教・化尊・仁義も亦趣を殊にして致を一にし、派を異にして源を同じくするなり。何を以てこれを明かにせん。孟子は……（中略）……是れ人に勸めて心源を汰ぎ、天理に返らしむる者なり。荀卿……（中略）……是れ人に勸めて嗜慾を黜け、良善

を求めしむるなり。……（中略）……然りと雖も、孟子の心、人の性を以て皆堯舜の如しとせば、未だ至らざる者斯に勉む。荀卿の言、人の性を以て皆桀跖の如しとせば、則ち及ばざる者斯に怠る。書に曰く、惟れ人は最も靈たり、と（泰誓）。記に曰く、人生れて靜、物に感じて動く、と（樂記）。則ち軻の言、經に合して益多しと爲す。故に尤なりと爲さんか。

「孟荀言性論」の内容からは、その性説の骨組には、韓愈の性三品説を、その修養論的な側面には、李翺の復性滅情説を見出す、というように、「原性」・「復性書」各々の根幹をなす要素との關連が明確に看取される。仔細についてはすでに論じているので別稿(6)に譲るが、皇甫湜の性説は、内容上、韓李兩性説と深い繫がりを有するものと言える。これは、先に掲げた「自明誠論」が「復性書」との關連面を強く考えさせたのに比し、大きな相違點である。

ところで、四者の性説作成の次序における「孟荀言性論」の位置は、解決すべき問題點として殘されていたのであるが、右に述べた四者の性説の内容上の關連から考えると、すでに明かになっているところの〈「自明誠論」→「復性書」→「原性」〉の次序を勘合すれば、形式的には次の二通りの場合に絞られるものと思う。一つは、「孟荀言性論」が「原性」の後に位置し、從って皇甫湜が韓李の兩性説の内容を折衷した場合。あと一つは、「孟荀言性論」が「復性書」と「原性」の中間に位置し、從って皇甫湜が韓李兩性説を繫ぐ役割を果した場合である。しかしながら、「孟荀言性論」と「原性」相互の内容や、四者の性説全體の内容上の流れをさらに詳細に檢討していくと、上記の第一の場合、すなわち皇甫湜の性説が韓愈のそれの後に書かれたとする可能性は、薄いようである。その理由は以下の點にある。

一つに、同じ性三品説を展開するものの、「原性」は、皇甫湜が孟荀の兩説だけを話題にするのに對し、さらに揚雄の「善惡混ず」の説を加え、情についても性に對するのと同樣の分析を行っており、皇甫湜のそれと比較して内容的に整備され、發展性が認められる點である。これは、韓愈の性説が「孟荀言性論」に後れて出て來たことを示唆するものに他ならない。それと、もし「孟荀言性論」が「原性」に後れるものであるならば、例えば晩唐の文人、杜牧（八〇三—八五二）の「三子言性辯」（『樊川文集』巻六）のような形になってしかるべきであろう。理由のもう一つには、韓愈が「原性」の末尾に「今の（性を）言ふ者は、佛老を雜へて言ふなり。佛老を雜へて言ふ者は、奚ぞ言ひて異ならざらん。」と云う他者の性説に對する批判の言葉に見出される。批判の對象に李翺が含まれるのは勿論だが、主たる對象は、實は皇甫湜であったと見なされる。佛説から離叛できずにいた皇甫湜に對し、韓愈がたびたび聖道を指教していたことは、韓愈の「與孟尙書書」（『韓昌黎集』巻十八）においての發言からも知られる通りである。つまり、韓愈の目には、たとひ性三品説自體は、儒家の正統的な理論と認めるにせよ、皇甫湜のそれは、佛老の言説を雜えた異端の説と映るのである。

では、皇甫湜の「孟荀言性論」は、一體、何故に韓愈から「佛老を雜へて言ふ」との批判を受けたのであろうか。李翺や歐陽詹の性説も、當然その批判の對象に含まれるであろうから、併せて韓愈の「原性」の内容と見較べてみる。そこで最も特徴的な事柄と見なされるのは、論辯の典據としての經書の引用句の相違であろう。韓愈以外の三者には、引用句に一定の傾向が窺われる。「原性」には見えず、他の歐陽詹・李翺・皇甫湜のうち二者以上が引いている句を例として擧げ

れば、左の如くである。

○禮記・樂記篇「人生れて靜なるは、天の性なり。……」(李・皇)

○禮記・樂記篇「人、物に化するは、天理を滅して、……」(李・皇)

○禮記・中庸篇「誠なるによりて明かなる、これを性と謂ひ、……」
(歐・李)

○禮記・中庸篇「ただ天下、至誠のみ能く其の性を盡すと爲す。……」
(歐・李)

○禮記・大學篇「古の明德を天下に明かにせんと欲する者は、……」
(歐・李)

○周易・説卦傳「……理を窮め性を盡して以て命に至る。」(李・皇)

因みに、興味深いこととして、中庸期に活躍した華嚴中興の第四祖、澄觀が『華嚴隨疏演義鈔』(卷十四)の中で、李翺の「復性書」において主要な位置を占めている引用句である繫辭傳の「一陰一陽これを道と謂ふ、……」とか、「寂然不動……」とかの句、あるいはまた樂記篇の「人生れて靜なるは、……」の句などを取り上げ、佛説の旨とは異なるものであることを論じている。この事實は、これら經書中の字句が當時、繁頻に佛説の中に取り入れられていたことを示唆しよう。また、以上列擧した經書の字句はほとんど全てが、その思想上の成立を道家風の思考の影響下に求められることは、思想史研究の上から認められているものと思う。とすれば、當時の道教の徒も、それらの經書の字句を三教融合の便方として利用したであろうことは、容易に想像がつく。

韓愈の場合は、儒家言、つまり經書中の語句であっても、それに道家風の思考の傾向が強く感じられるようなもの、あるいはすでに佛家の論説の中に取り入れられてしまったものに對しては、それを異端的なものとして批判し、排除するのである。謂わば「原性」は、韓愈にとって、儒家としての純粋性、主體性を保持せんとする自負を示すものと言えよう。皇甫湜と同じく性三品説を展開するとはいえ、内容を異にした所以である。であるからこそ、「原性」の末尾に、それとの區別を明かにすべく、前述の言葉を附記したのであろう。以上を要するに、皇甫湜の「孟荀言性論」は、内容的に見れば、少くとも韓愈の「原性」に先だって書かれたものと考えられるのである。

さて、皇甫湜の性説が韓愈のそれに先行することはほぼ確かめられたが、加えて、皇甫湜の性説を中心にして、四者の性説全體の流れを追ってみることにする。「孟荀言性論」は、その標題が示すように、孟子と荀子の相對する性善性惡兩性説間の不整合を解決することにあくまで力點が置かれている。これは、孟子の性善説のみを取り上げ、性は善のみとする李翺の主張に對抗して生まれて來たのが皇甫湜の性説であろうことを想定させる。皇甫湜は、「是れ聖人に於けるみな一偏の論なり」と云い、「荀卿もまた大儒なり」と考えるのだが、この觀點からすれば、李翺の見解はやはり片手落ちとせざるを得ない。そこで、皇甫湜は、孟荀兩性説間の矛盾を解消する問題に取組むことになった。では、その問題を解決するには、いかなる理論が要請されたか。そこで、性に等級ありとする考え方を内包する歐陽詹の「自明誠論」に着目するに至り、「推してこれを言はば、性の品に三有り」という理論を得たのである。すなわち、「孟荀言性論」は、李翺の性説と歐陽詹の性説を、謂わば合流させることによって成立したものと見なしてよかろう。それ故、皇甫湜は、性三品説を骨子とする新たな性説を展開しつつも、歐陽詹の人間觀や李翺の修養論的な側面を引き繼ぐのみならず、「軻の言、經に合して益多しと爲す」と述べ、性は善

のみとする李翱の考え方から、完全には脱却できずにいたのではあるまいか。思うに、皇甫湜の性說の中から佛老的な要素を排除する一方、その結構は受け繼ぎ、さらに内容を整備し發展させる、という具合にして出來上ったのが、韓愈の「原性」に他ならぬ。つまり、「原性」は、「孟荀言性論」を繼承しつつもそれを超克する形で成立したものと思われる。

以上の本節で得られた知見と前節で明かにした結果とを総合するなら、まず歐陽詹の「自明誠論」が成り、次いでそれを踏襲する形で李翱の「復性書」が成り、さらに歐陽詹の性說と李翱の性說を折衷し合流させる形で皇甫湜の「孟荀言性論」が成り、最後に皇甫湜の性說を吸收しながらもそれを乘り越えんとして韓愈の「原性」が成った、と結論づけることができるようである。假に「自明誠論」が貞元十五年の作であると想定するなら、出發點の「自明誠論」から、一應の終着點の貞元二十一年作の「原性」に至るまでの期間は、ほぼ六年ということになり、このほぼ六年の間に、四人四樣の性說が展開されたことになる。これを圖表にすれば、左の通りである。

歐陽詹……［自明誠論］……貞元十五年（？）
（踏襲）
李翱……［復性書］……貞元十八年
（折衷）
皇甫湜……［孟荀言性論］……貞元　？
（繼承・超克）
韓愈……［原性］……貞元二十一年

四、四者の性說の祖型と役割

歐陽詹・李翱・皇甫湜・韓愈の四者の性說が〈「自明誠論」→「復性書」〉→「孟荀言性論」→「原性」という内容上の流れをもつ一連の作であったことは確かめられたであろうが、それでは、これらの性說が出現した直接的な事情は、何那邊にあったのであろうか、また、個々の性說が如何なる役割を果したのであろうか、一考を要するところであろう。そこで、彼らの性說の祖型とも呼ぶべき先驅的な著作を手懸りとして、檢討を進めることにする。

李翱の「復性書」に關しては、つとに北宋の石室祖琇（『佛教編年通論』卷二四）が、「說、天台止觀統例と頗る合す」と指摘している。この「天台止觀統例」とは、言うまでもなくかの梁肅（七五三—七九三）の「止觀統例」一篇のことである。「止觀統例」と「復性書」との内容上の關係については、すでに常盤大定氏（『支那に於ける佛教と儒教道教』一三五頁）が詳述されているが、確認する意味からも「止觀統例」の内容の一部分を揭出しておきたい。

> 夫れ止觀は何をか爲すや。萬法の理を導いて實際に復する者なり。實際とは何ぞや。性の本なり。物の復す能はざる所以の者は、昏と動とこれを然らしむるなり。昏を照らす者これを明と謂ひ、動を駐むる者これを靜と謂ふ。明と靜とは止觀の體なり。……其の要を擧ぐれば、則ち聖人の、深きを極め機を研き、理を窮め性を盡すの說か。……是れただ一性のみ、これを得るを悟と爲し、これを失ふを迷と爲す。一理のみ、迷ひて凡と爲り、悟りて聖と爲る。迷ふ者は自ら隔つ。理、隔てざるなり。失ふ者は自ら失ふ。性、失わざるなり。止觀の作、異同を離れて聖神を究め、

羣生をして性を正して理に順はしむる所以の者なり。性を正し理に順ふは、覺路に行きて妙境に至る所以なり。……古人云ふ、生れながらにしてこれを知る者は上、學んでこれを知る者は次、困しみてこれを學ぶは又其の次、と（『論語』季氏）。夫れ生れながらにしてこれを知る者は、蓋し性德なる者なり。學んでこれを知る者は、天機深き者なり。嗜慾深く、耳目塞がり、學ぶと雖も而も知らざるが若きは、斯れ下と爲す。（『唐文粹』巻六一）

「止觀統例」を通讀すると、確かに「復性書」の基本的な構成と個々の規定に類似點が認められる。(7) また、掲出文の後半部に「古人云ふ、生れながらにして……」と述べられている論點からも明かなように、歐陽詹の「自明誠論」とも思想內容の上で繫がりを有するものであることが窺われる。勿論、「止觀統例」は、「止觀の作、……妙境に至る所以なり。」と述べ、あくまで佛敎の奧旨を說かんとする立場のものであり、「其の要を擧ぐれば、則ち聖人の……の說か。」と云っている通り、佛家の立場からの儒佛の調和を意圖する內容を含んだ作品である。當然、歐陽詹や李翺が儒家の聖賢の道を明かにせんとして書き著した各々の性說とは、その立場を異にする。しかしながら、思い起せば、李翺の「復性書」の原型とも見なされる〃中庸說〃が書かれた契機は、梁肅との面謁にあった。そして、その梁肅と陸傪とには、實は深い交情が存しており（『權載之文集』巻二四「歙州刺史陸君墓誌銘」參照）、この兩人が思想傾向を同じくしていたと考えれば、陸傪がその〃中庸說〃に讚辭を送ったのも、いまとなっては首肯できよう。また、歐陽詹が進士に及第を果す際には、副考であった梁肅の推擧が與っていた（『韓昌黎集』巻十七「與祠部陸員外書」參照）のである。以上の點を考え合せれば、李翺と歐陽詹が直接、梁肅から思想的な影響を強く受けたことは、事實として定められよう。

さらに、右の梁肅と交遊のあった人物が、韓愈の長兄、韓會（七三八―七七九）である。韓會と梁肅は、ともに李華（?―七七四?）の門に遊び、古文を學んだ間柄にある。ことは、宋の王銍が撰したところの「韓會傳」（魏仲擧編『新刊五百家注音辯昌黎先生文集』附「韓文類譜」八）に見える。この「韓會傳」の中に、韓會の「文衡」と題する「文」について論じた小文が引かれており、次のように云う。

蓋し情、性に乘じて萬變生ず。聖人、變の齊せらる無ければ必ず亂るるを知り、乃ち上下に順ひて以て物を紀し、君爲る臣爲る、父爲る子爲る、皆經有らしむ。道德仁義禮智信を辯じて、以て其の情を管り、以て其の性に復す。此れ文の由りて作る所なり。

右に述べる韓會の「情を管り、以て其の性に復す」という究極的な主張は、李翺の「復性書」における「情を滅して性に復る」という主題と本質において通ずるものと言えよう。と言うことは、李翺の性說の命題は、すでに韓會の文章理論の中で打ち出されていたものであることが判明する。と同時に、古文運動の先驅者に數えあげられるこの韓會や前述の梁肅と、李翺が人脈の上でも思想上においても直接、繫がっていたことが明白になる。他面、韓會の「文衡」と題する文章理論の中に、人性論的な側面がすでに附着する形で展開されている點は、看過し得ないところである。この「文衡」のように、文章理論に人性論が組み込まれている例は、數多く見られるが、その中から同じ例として、韓會より時代のわずかに遡る尙衡（至德年間の御史大夫）なる人物の「文道元龜」と題する作品を擧げよう。

君子の文を上等と爲す、其の德全ければなり。志士の文を中等と爲す、其の義全ければなり。詞士の文を下等と爲す、其の思全け

れぱなり。……(中略)……古人の、文有るを貴ぶは、將に以て行を飾り、德を表し、情を見はし、事を著し、天人の際に杼軸し、性命の元に道達し、君臣の位に正しく復り、鬼神の奥に昭かに感ぜんとすればなり。(『全唐文』巻三九四)

尙衡の、君子・志士・詞士の文をそれぞれ上等・中等・下等となす論點をもって、韓愈らの性三品說の魁とすることも可能であるやも知れぬが、とにもかくにも、文章理論と人性論が結合した樣相を呈する事實は、これによっても確かめられよう。また、この事實は、見方を換えれば、文章理論と密接に結びついていた人性論が、李翶らによって始めて分離され、獨立した儒家の人性論として、自覺的に展開されるに至ったことを示している、とも言えないであろうか。この點について、經過を遡って推測してみよう。言うまでもなく、文體改革を主張する人々にとって、まず根據とする理論の必要性が生じて來る。文とは何か、如何なる働きをするものなのか、どのような價値をもつものなのか。そして、何をどのように學び修めるのか。人性論ならぬ〃文性論〃が展開されて來る。以上の問題に對する解答は、こうである。文とは古文のことであり、古文とは、聖人の道である。そして、古文を學ぶとは、聖人の道を體得することである。それでは、聖人の道とは、そして、聖人とは、道とは具體的に如何なるものであるのか。また、聖人の道をどのようにして體得するのか。次に問題となる議論である。すなわち、この議論の段階におけるところの課題解決の役割を擔ったのが、歐陽詹であり李翶であり、皇甫湜であり韓愈であったのではなかろうか。

また、以上の推察から、一つの見方としてではあるが、文體改革を唱えて文章理論を展開する文學運動の中から、「聖人の道」を明かにするという課題が生じ、そこで、その文學運動は、儒家としての意識に昂揚された人士の出現と相俟って、「聖人の道」を明かにするという思想運動へと發展せられ、この思想運動へと發展して行く過程から生まれて來たのが、「自明誠論」・「復性書」・「孟荀言性論」・「原性」という性說に他ならぬ、ともまとめられよう。そして、歐陽詹・李翶・皇甫湜・韓愈の個々が擔った役割とともに、その發展過程をさらに細かく段階づけるなら、以下の如くになろう。まず、前段階として、祖型と目された二つの作品、すなわち、一つは韓會の「文衡」、これを文章理論における人性論の展開の段階とし、一つは梁肅の「止觀統例」、これを儒佛道三敎の混淆による人性論の展開の段階と位置づける。ここで始めて彼ら四者の役割が生ずるのであるが、第一段階は、歐陽詹と李翶による、文章理論からの人性論の分離及び獨立と、三敎融合理論からの儒家言の抽出及び發揮の役割、第二段階は、皇甫湜による儒家の正統的な性說の選擇と發見の役割、第三段階は、韓愈による儒家の正統的な性說への濾過と純化の役割である。

おわりに

これまで思想史上、取り上げられることのなかった歐陽詹の「自明誠論」や皇甫湜の「孟荀言性論」が、李翶の「復性書」や韓愈の「原性」と、深く關わりをもつものであったことは、小論において明かにし得たものと思う。とりわけ、四者の性說が內容の上で、(「自明誠論」→「復性書」)→「孟荀言性論」→「原性」という流れをもつ一連の作であったこと、そして、內容的には一見、相容れない樣相を示す「復性書」と「原性」が、「孟荀言性論」を媒介にして結びつくものであったことは、留意すべき點であろうと考える。

しかしながら、彼らの性説相互間の關連を追うあまり、個々の性説における內容上の特點については、充分に檢討を加える餘裕がなかった。とくに、「復性書」と「原性」に關しては、兩者に性のみならず情についても論じられているにもかかわらず、小論において觸れることをしなかった。もとより性は、情と切り離して論ずるべきものではなかろう。さらに、彼らの性説が生まれるに至った背景とそれらが果した思想上の役割についての問題も含め、今後の課題として、引き續き解明に努めることにしたい。

注(1) 拙論「李翺の交遊關係について——韓愈および皇甫湜との關係を中心にして——」(『竹內照夫博士古稀記念中國學論文集』所收)

(2) 同右

(3) 拙論「復性書の成立について」(『中國哲學』第七號)では、成立年を貞元十三年としているが、ここに補正する。

(4) 歐陽詹の人物分類は、恐らく『漢書』の「古今人表」によったものと考えられる。

(5) 歐陽詹の學問觀の中には、道統論的な考えがすでに萌芽しており、この點は注目に値する。文武周孔の敎えつまり道が、學問として顏回や子游子夏に傳えられ、實現された、と解釋できるからである。なお、この道統觀は、四者の性説の作成年から考えると、韓愈よりも早く李翺においてほぼ確立したものとなっていたと言えよう。

(6) 注(1)拙論參照

(7) 注(3)拙論においても論じたことがある。

〔附記〕

小論は、昭和五十六年度日本中國學會第三十三回大會において口頭發表を行った草稿に、加筆訂正したものである。